

「往生をねがうしるし 世をいとうしるし——
親鸞聖人の教えと非戦非核の願いに聞く——」
全戦没者追弔法会記念講演 (2011.4.16 東本願寺)

「戦争の世紀を超えて」

東京大学大学院教授 姜尚中氏

未曾有の大震災

本日は、全戦没者追弔法会に招待していただき、どうもありがとうございます。

当初、今回の追弔法会で予定しておりました内容が少し変わりました、大変な事態が日本を襲って、私も、三月二十八日から三十日まで、福島県相馬市それから南相馬市に行つてまいりました。先程、宗務総長から、仙台から京都にお戻りになって、言葉にならない本当に大変な惨状であるというお話を聞きました。私自身、戦後、熊本で生まれましたが、まさに初めての経験でございました。

震災のご体験がある方々であれば、今から六十数年前の惨状を彷彿とされたのではないかと思います。それは、この日本において、貴族社会から武家社会に移っていき、様々な宗教改革が行われた、あの時代と非常に酷似していたのではないかと思います。そういう意味で、今回の未曾有の災害という問題と、何らかの関わりを持った形でお話をさせていただきます。もちろんなら震災と戦争は本質的に異なります。

しかしながら、ある日突然人が亡くなってしまふということにおいては、両者に共通点がございまして、また更に、今も被災地においては、一人一人の方々が行方不明になられております。原発事故の予断を許さない状況の中で、私が取材しました被災者の中には、亡くなられた方々を引き取ることもできない、あるいは行方不明の自分の親族を捜すこともできないという、苦しみを訴えておられる方も大勢いらっしゃいました。被災地に行きますと、津波が人間の生と死を紙一重で分けるところがございまして、わが家は全員助かった、また、家も半壊で済んだけれども、最も親しかつたお隣の方々は全員亡くなられたというところでございます。

つまり、戦場においても、また震災の場所においても、助かった人間と亡くなった人間と、それを分かつかつものが何であるのか、生き残った者は、終生それをこころの傷として生きていかなければいけない、そのことが被災地を少し回っただけでよくわかりました。

瓦礫の中から愛と希望は見つかるか

私は故あってある番組の司会をしておりました。日本ではすでに親鸞聖人に代表される鎌倉仏教は、ヨーロッパに先んじた数百年前にある種の宗教改革を行っておりましたけれども、十六世紀、ヨーロッパでは宗教改革がありました。マルティン・ルターが宗教改革

の狼煙を上げるわけです。その時代に活躍した画家でブリュッゲルという人がいました。その画家の絵に「死の勝利」というものがございます。この絵は、骸骨が無数にあつて、生きとし生ける者に取り憑いており、ある種のこの世の地獄のような絵図が描かれております。諍（いさか）い勝利者は死である。人間と人間が諍いを起こし、争い、そして最後に勝利を収めるのは人間ではなく死であるということを、この絵は語っております。

十六世紀、ペストや疫病、あるいは様々な殺戮がございました。先程、宗務総長が戦争を起こす一つの原因の中に、民族や人種や宗教の違いがあると話されました。まさしく、同じ人間、同じ場所に住みながら、宗教の違いで相手を殺戮するということが、現在のヨーロッパでは想像できない時代の中にあつたことは間違いありません。また同時に、天変地異、震災あるいは疫病によって人が亡くなり、場合によっては、人が人を喰らうということもあつたと思います。これが無明の世界ということだと思っております。そういう世界が、この二十一世紀の日本社会の、あの東北地域に震災、津波という形で訪れたことに、我々は慄然とする思いがするのではないかと思います。我々にとつて何よりも問題なのは、原発の事故が予断を許さないことです。これは恐らく人類史上初めての、私たちが想像もできない未知のゾーンに、今入りつつあるというこ

とを我々に示しております。東京においても様々な風評が流れ、そして不安と恐怖がどこか目に見えない形で渦巻いています。福島においては好むと好まざるとにかかわらず、放射能を浴びながら、その地で生活をしていかなければなりません。

この被災の上に、多くの方々が今のような恐怖と不安の中にいるということは、戦後六十数年経ち、この豊かな日本社会の中で、まさかこのようなことが出現するとは、私自身も六十年生きてきて思ってもいないことではないでした。このような時に、日本あるいはアジアの貴重な戦争体験と、どのように関わらせて考えたらいいかを、私も今日ここを訪れる前につらつら考えてまいりました。

今日私がお話しする内容を冊子に載せております。その文章の最後に「瓦礫の中から愛と希望は見つかるか」と書きました。この文章は、三月十一日の大震災の前に書いたものです。まさしく今、東北地方に瓦礫が二千八百万トンあるいは三千万トンもうず高く積まれている状態です。この瓦礫は単なる瓦礫ではなくて、人々の貴重な生活の場でもございました。その瓦礫の中から希望と愛が果たして見つかるかを、今日のお話で若干なりともお伝えさせていただきます。

二十世紀の末裔として

私は文章の中で三つの点を指摘しました。

私たちは二十一世紀において二十世紀の末裔として生きております。二十世紀、このたかだか百年の時代、恐らく何億という人間が無残な死を迎えたと思います。人類史が始まって以来、恐らく戦争あるいは殺戮によって亡くなった人間を、全部足しても二十世紀に亡くなった人々に、果たしてその数が匹敵するかどうか、私にもわからないほどに、おびただしい数の人々がこの百年で亡くなりました。なぜそういうことが起きたのか。言うまでもなく、科学技術というものが人を殺すために大いなる効果を発揮したからだと思えます。このことをまず我々が最も考えなければならぬと思います。

一般的に、科学技術は戦争のためにも平和のためにも利用できるかと考えております。しかし、今回の原発事故を考えてみても、「自然災害であっても、原発事故が絶対におこらない」という「絶対安全」を前提に、過去に何度も地震が起き、津波があった地域に、原子力のプラントが建てられました。

私は、福島第二原子力発電所を受け入れた楢葉町という六千八百人足らずの村の人々の疎開地に行つてまいりました。会津美里町にその六千八百人の内の、わずか一千人の方が疎開しておられました。それ以外の方は、もうすべて散り散りばらばらになり、そして、原発と共に歩んできた村が全て地散してしまふという惨状でございました。

その町長の言葉が、私の耳柔（じだ）に残っております。東北地方の非常に質朴なお年寄りでございました。私に「これは踏んだり蹴つたりだ、なぜこんな目に遭わなければいけないのか。日本の最先端の科学技術というのは、絶対にこのような事故というものを起こさないということを、我々は何度も何度も人から聞かされ、そしてこれを受け入れ、原発と共に自分たちの生活というものを維持してきた」と。

今この原発事故の現場で、死に至るか至らないかわからないような決死の作業を進めているあの作業員の方々は、恐らくこの地域の方々ではないかと思えます。大袈裟に言えば、日本の命運は、まさしくその現場で決死の作業をされている方々にかかっていると、言っても過言ではございません。その方々は、英雄になるために作業をしているのではなく、自分たちはまさしく原発を受け入れ、その中で、「絶対に事故はないと信じ、そして住民にも自ら語っていた。その後ろめたさというものを、自分ではどうすることもできない。私たちは英雄になりたいために、このような作業を進めているわけではない」ということも、異口同音に話されておりました。

広島、長崎を経験したこの国において、かくも原子力に対して、なぜこれほどに底抜けの楽観主義に染まることのできたのかということ、我々は一度検証してみる必要があると思えます。